

【提案】

接地する拡幅コンテナの活用 新しいスワップ輸送システム

本誌主幹 横路美亀雄

■はじめに

今年は新型コロナウイルスの強襲で、2020 オリンピック・パラリンピックが一年延期、政府は全国に「緊急事態宣言」を发出して不要不急の外出を強く国民に要請しました。企業は一斉にテレワークに切り替え、休校になった学校も教師と生徒がオンラインで教習、学習の遅れを最小限に抑える活動を展開しました。

また濃厚接触の可能性のある遊技場や飲食店、ナイトクラブ、ライブハウスなども休業を呼びかけたので多くの店がシャッターを下ろしました。独自に営業を続けたお店も、市民は外出を抑制されて街に出て来ないので客足は疎ら、商売にはならなかったようです。ただ、いち早くテイクアウト(出前)に切り替えたお店やお弁当屋さんや繁盛し、宅配業者も大忙しとなりました。

銀座に事務所を置く本誌にも4月以降誰も訪ねて来なくなりました。中央通りを歩く人も疎らでデパートも高級ブランド店も休業しているので閑散としていました。

正に世の中が急転直下“凍結”された状態でこの先の見通しが立ちません。人類はこれまでに何度もウイルスに襲われていて、1918年から1920にかけて猛威を振るったスペイン風邪は、世界で約5億人が感染し5000万人が死亡したと伝えられています。

世界中が新型コロナウイルスに見舞われて経済がストップしている時に、日本だけが影響を受けないという事はありません。企業も個人も同じで渦中であってはもがいてもどうにもなりません。ただ、このような時期をどのように過ごすかによって、終息後が大きく異なるのではないかと思います。

私の場合は囲碁や音楽など独りで学習できる趣味がありますので、かなりの時間をそれに充てましたが、仕事の関係では「あったら良いな」という物を考えてみました。それが、以下に提案する『拡幅コンテナの活用法』です。

■拡幅コンテナとは

物流のコンテナは国内では5トン(ゴトコン)とか10トン(31フィート)、国際コンテナでは20ftと40ft、最近は45ftも増えているようです。

拡幅(カクフク)コンテナはイベント用などに使われていますが、それほど多くの実績はありません。もともとはバン型のトラックボデーの側面を二重(箱)にして和風筆筒の引き出しのようにスライドできるようにしたものが原型になっています。通常は拡幅ボデーと呼んでいますが、拡幅して荷室のスペースを広くできるので、災害時の救護車としても使われています。

通常はバン型ボデーの片側だけ拡幅できるようにした物が多いのですが、左右両方に拡幅できるものもあります。

本誌の一昨年9月号には山口県のオオシマ自工が開発した『モバイルモスク』の発表会の模様を掲載しましたが、これは“W拡幅車”と呼んでいます。2020オリンピックで来日するイスラム教徒の為のモスクとして(株)YASU PROJECT(井上康治社長)が企画したものです。シャシは大型の低床3軸車で荷箱の左右を拡幅すると荷台に約50平方メートルのスペースが実現します。前後に4基の空調がついて同時に50名のムスリムがお祈りすることが出来ます。

オオシマ自工が開発したW拡幅は非常に精工に出来ていて、シャシをアウトリガーで固定した後のW拡幅操作は数分で完了します。しかも、ムスリムが片方に寄って偏荷重になっても拡幅した荷箱の沈み込みは殆どありません。

『拡幅コンテナ』は、このW拡幅あるいは片側拡幅できる車体部分だけをコンテナとして活用できるようにしたものです。コンテナは本来、物流用具ですから、輸送目的以外に活用する場合はコンテナと表現しない方が良いのかも知れませんが、分かりやすくする為にここでは拡幅コンテナと表現します。

コンテナは単なるボックスですから、運搬するためにはフォークリフトとかクレーンなど車両に積載する荷役機械が必要になります。鉄道や船を利用する場合は、コンテナがターミナルに集

まることが多いので荷役機械が有効なのですが、拡幅コンテナは物流よりも各種イベントや店舗に使用される事が多いので、荷役機械がない場所でも積み降ろし出来る方が便利です。

そこで考案したのが、スワップボデーの脱着方法です。スワップボデーは効率輸送に繋がることから、今年も国土交通省が補助金を用意して普及促進に努めています。(関心のある方は国土交通省のホームページをご覧ください)

以下に、各種の拡幅コンテナ活用法を紹介しますが、コンテナの脱着は当社が独自に考案したシステムです。

■独自に考案した脱着システム

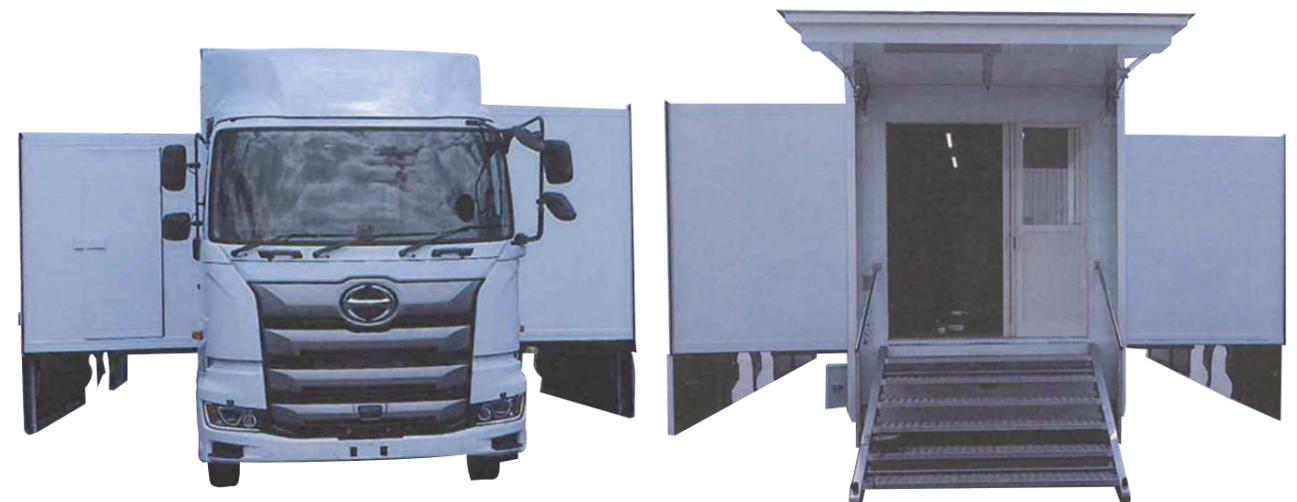
では、運搬車と拡幅コンテナの脱着システムを簡単に紹介しましょう。

トラックの高さ制限は、原則としては3.8mまでですが「高さ指定道路」に限っては4.1mまで、制限外積載許可を受けたトラックに対しては4.3mまで許可されます。拡幅コンテナは国際コンテナと同様ですから、積載した高さは4.1mまで大丈夫です。この点は、運搬するトラックが低床車でしたら、それだけ拡幅コンテナの高さを高く出来るという事です。後述しますが拡幅コンテナをお店とか教室、商品展示等に使う場合は天井高を高く出来るので、開放感のある空間が実現します。また運搬車が高床のトラックであった場合でも通常のトラックよりも高さ制限に30cmのゆとりがありますので、無理のない設計が可能です。

まず、運搬車は拡幅コンテナを荷台に固定する欽定装置(ツイストロック等)の受け側(雌)と、荷台後方左右にコンテナ後方に取付けた凸部がはまるポスト(凹状)があるだけです。従って、拡幅コンテナを運搬しないときは鋼材や重機、一般のカーゴ車としても流用できます。

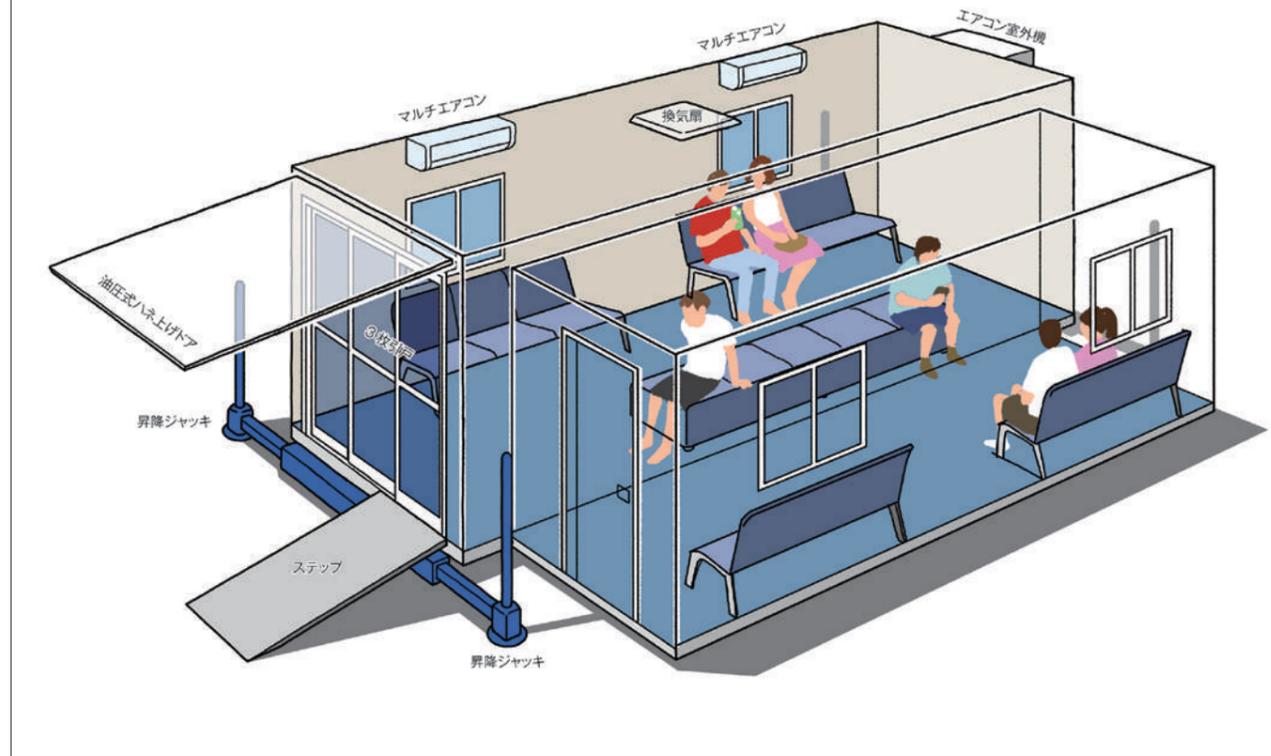
一方、拡幅コンテナには次の設備が必要です。

① コンテナ後部の両側角、通常はコーナーポストと呼ばれる部分にコンテナを昇降させる油圧シリンダーを組み込みます。



(株)YASU PROJECTが企画、オオシマ自工(株)が開発したW拡幅のモバイルモスク車

2020 オリンピックの暑さ対策に提案



- ② 前方の油圧シリンダーは左右方向の動作とコンテナを昇降させる上下の動作をします。従って、前方の油圧シリンダーの構造はHの形になります。
- ③ コンテナと荷台を固定するツイストロック(雄)は、コンテナの裏側前後左右4ヶ所に取り付けます。
- ④ コンテナには油圧シリンダーを作動させる為の電動油圧システムを組み込みます。電気はコンテナに搭載したバッテリーや運搬車のバッテリーを使用します(必要に応じて市中電源も使用可能)。

■ 拡幅コンテナの脱着手順

まずコンテナの積載方法から説明しましょう。

従来のスワップボデーは、運搬車から降ろしたコンテナ(荷箱)は、4本~6本の支持脚に支えられています。底部が荷台高さよりも高い位置になります。しかも、重量のあるシャシは外されているので重心位置が高く、広い壁面に台風などの強風が吹きつけると転覆の危険性があります。

そこで、今回の拡幅コンテナでは運搬車から下ろした後、油圧シリンダーを縮めることによってコンテナを地面近くまで下げることが可能となっています。

また、従来のスワップボデーのもう一つの難点は、狭い支

持脚の間に長大な運搬車の荷台を差し込まなくてはならないので、運搬車はコンテナの遙か前方から支持脚に接触しないようにハンドル操作をしなくてはならず、脱着のためにコンテナの前に広いスペースが必要でした。つまりスワップボデーを導入する為には広い敷地が必要になります。

この拡幅コンテナでは、その難点を克服するために、コンテナ前方の支持脚はH型構造にして、H型の幅をコンテナ幅の約二倍に広げたあと、上下シリンダーでコンテナを昇降できるようにしました。

これによって、前方支持脚の幅は運搬車の荷台の二倍近くになり、運搬車は斜め前方からコンテナの下に後進で侵入できますから、前のスペースも狭くて済みますし、ハンドル操作も簡単になります。

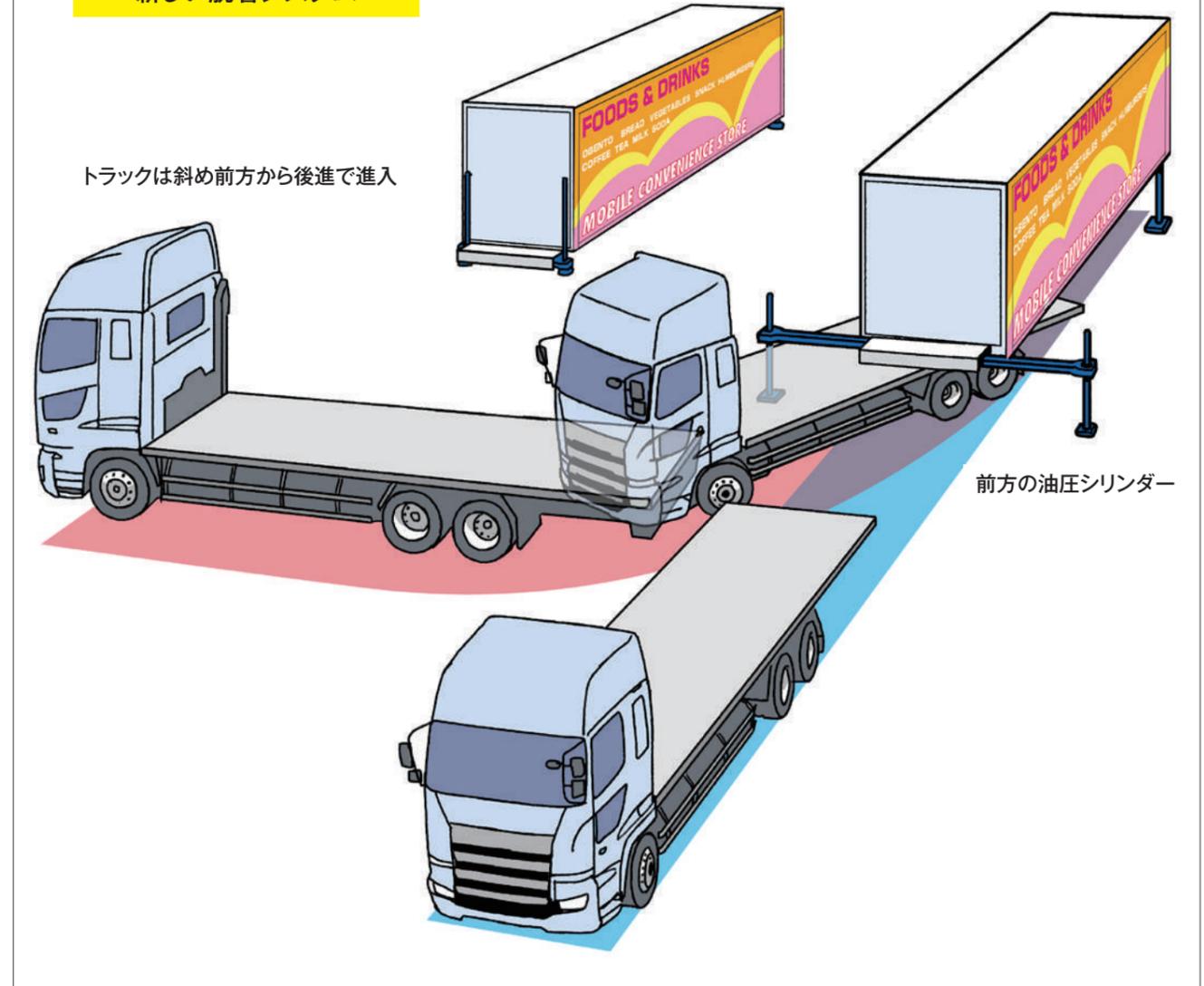
前後の支持脚はコンテナ裏面の4ヶ所の凸によって浮いた状態になっています。

この状態でコンテナの幅に縮めてあるH型シリンダーの幅を広げます。次に前後4本の油圧シリンダーを伸ばせば、コンテナは所期の高さにリフトアップさせる事ができます。

コンテナ前方の支持脚はコンテナ幅の約二倍に広げてありますから、運搬車は楽々コンテナの下に侵入することが出来ます。

拡幅コンテナ後部のシリンダーはコンテナ後部角のコーナーポストに格納されていますので、後進する運搬車の荷台後部と

新しい脱着システム



シリンダー(ケース)が接触することになります。この拡幅コンテナではこの接触した位置が荷台に積載するコンテナの位置になり、ツイストロックでコンテナと荷台を固縛する位置とも一致することになります。

前後の油圧シリンダーを縮めるとコンテナが下がって荷台に積載され、ツイストロックによって固縛されます。この段階では前方の油圧シリンダーは広げられたままなので、H型の幅を荷台幅まで縮めると、積載完了です。また、コンテナ後部裏の凸部品と荷台凹部に合致して、コンテナは動かなくなります。

ここで疑問になるのはコンテナ後部は油圧シリンダーのケース幅だけ荷台からはみ出している事になります。

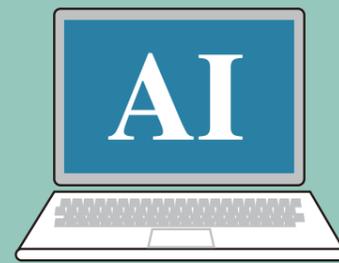
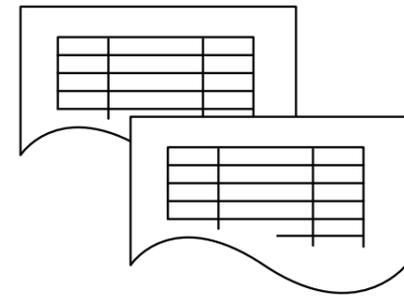
この点は道路交通法施行令(22条)によって積載物の後部へのはみ出しは車両全長の10分の1まで許されているので大丈

夫なのです。これで電源コードを外せば運搬車は出発できます。

次に、拡幅コンテナをトラックから下す手順を説明しましょう。まず、運搬車の電源や市中電源を利用する場合は、電源コードを接続します。

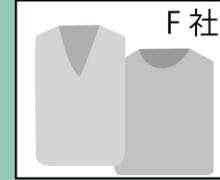
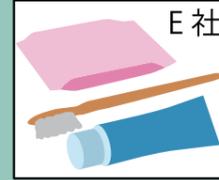
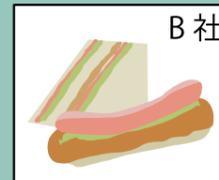
ツイストロックと凹に嵌っている前部のロックを解除します。次にコンテナ前部のH型シリンダーを左右に広げたあと、前後左右4本のシリンダーを伸ばすと先端が接地して、コンテナはトラックの荷台から浮き上がります。この状態でトラックを前進させるとコンテナの下から脱出できます。すでに前方の支持脚は左右に広がっており、ハンドルを切りながら前進することが出来ますので、前のスペースは狭くても大丈夫です。その後コンテナを下げると裏面4ヶ所の凸部が接地して所定の位置に降ろすことが出来ます。更に支持脚を縮めると前方の支持脚が地面から浮

システムイメージ



自動発注

オペレーションセンター

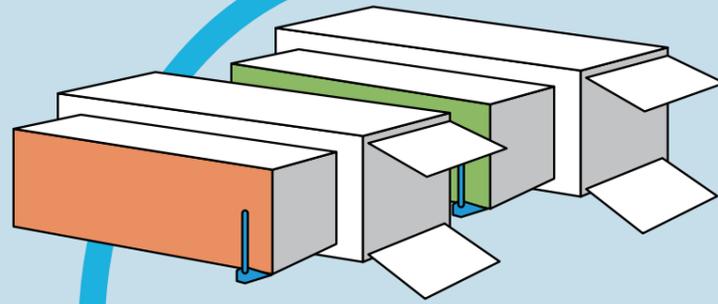


仕入れ

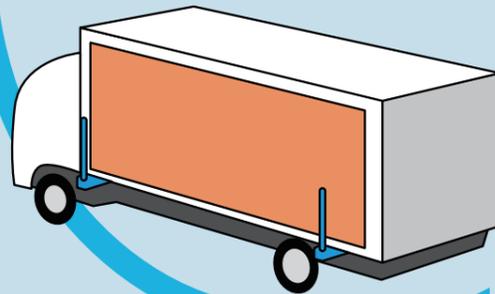


搬送・回収

商品が減ったコンテナを回収



無人コンテナ店舗



流通センター

自動倉庫に搬入



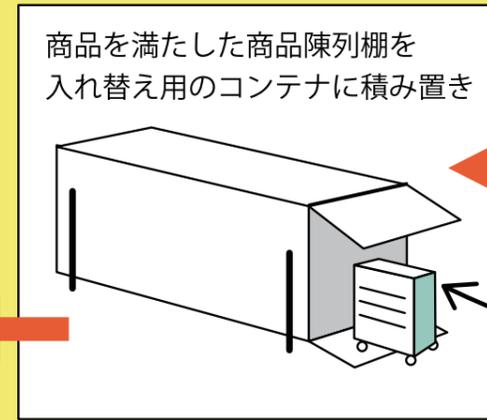
商品が減ったコンテナ

AIの指示に従って商品が減ったコンテナを回収。
商品をセットした商品陳列棚ケースと、
商品が減った商品陳列棚ケースを入れ替える。

搬送回収のループ

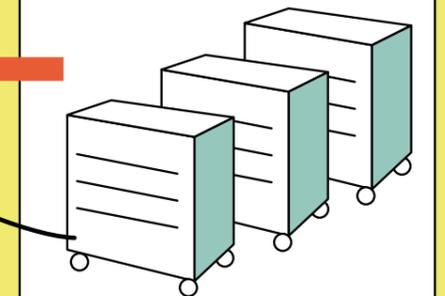
商品が減ったコンテナを回収したトラックに
商品を満載したコンテナを積載して
無人店舗置き場に搬送。

商品満載のコンテナ



商品を満たした商品陳列棚を
入れ替え用のコンテナに積み置き

商品陳列棚に商品をセット



コンテナ式無人店舗システム 《特許出願済》



いた状態になるので、左右に上げた支持脚はコンテナ幅に縮めることができます。運搬車の電源を使用している場合はここでケーブルを外します。

その後コンテナの幅は左右または片側を広げて広い荷室が実現します。この拡張コンテナは油圧装置がコンテナの角に収まりますので、前後に扉を付ければ通り抜けができます。また地面近くまでコンテナを下げることもできますので、スロープを付ければ車いすでの出入りも可能になります。

拡張コンテナの活用例 『モバイルコンビニ』

この拡張コンテナをオリンピックの暑さ対策、避暑用に活用することを計画したのはモバイルモスクを企画したYASPROJEKTOでした。昨年の夏は東京が異常に暑かったことから、2020のマラソンは札幌に変更になりましたが、同じような暑さになれば世界から大勢の観客が来日して熱中症で倒れる人が続出する可能性があります。

試作した大型のモバイルモスクは4基の空調を備えているので、暑さ対策にも使えるのではないかとオリンピック組織委員会に提案することになったのですが、コストの関係でコンテナにしたものです。ただ残念ながら暑さ対策用の拡張

コンテナは新型コロナウイルスの関係もあって中断になってしまいました。

次に大規模災害時の一時避難所をはじめ、拡張コンテナは多くの用途が考案されることとなります。その中のひとつが筆者がコロナ休暇を利用して考案したのが本号の表紙にも掲載した『モバイルコンビニ』です。

コンビニは正しくはコンビニエンスストアで全国展開はセブンイレブン、ローソン、ファミリーマートが日本の3大チェーン店です。他に広域に展開するミニストップやデーリーヤマザキ等があり、小規模も含めれば全国に約5万6000店もあると言われています。

一方、高頻度に消費される食料品や日用品などをセルフサービスで短時間に購入できるようにしたスーパーマーケットは全国に約8000店舗あるようです。

大手のコンビニは多くがフランチャイズ制になっていて、店舗のスペースから24時間営業まで本部との間で細かく取り決めがなされているようです。ローカルのコンビニで客も来ないのに24時間店を開けていたのでは人件費が嵩んで儲からない、と勝手に深夜営業を打ち切って、契約違反が話題になったのも最近の事です。

また昭和40～50年代に、郊外に展開した集合住宅(団地)は現在高齢者ばかりになって、スーパーやコンビニも団地から撤退して買い物難民が増加したので移動販売車による“移

動コンビニ”も増えています。

また今回の新型コロナウイルスで企業は従業員のテレワーク(自宅出勤)を積極的に推進したので、今後は都心の会社に出勤しなくても仕事ができる時代になります。「5G」と呼ばれる高度な通信システムが普及すれば更にテレワークが発展すると言われています。

そうすると、住居に対する考え方がこれまでとは変わって、仕事場を兼ねた住宅は土地や家屋も安く自然にも恵まれた郊外に移っていく事になります。消費構造が変わればコンビニやスーパーも地方に出て行くこととなりますが、果たして従来の規格化された店舗が必要なのか、再検討される事になります。

また、顔写真などによって個人認証が簡単で正確に出来る時代ですから、消費者は欲しいものを売り場からピックアップして持ち帰れば、代金はカードが無くても決済ができる無人販売が実現します。

■仕入れ⇒検品⇒ラック詰め⇒保管⇒ コンテナにセット⇒運搬⇒開店

これらの要素を考慮して、仕入れから販売まで、物流(ロジスティクス)も含めて最小人員で出来るシステムが46ページに掲載の「無人のモバイルコンビニシステム」です。

図表に添って一連の流れ(システム)を説明しましょう。起点はAI(人工知能)を搭載したコンピューターからスタートします。

団地の一角に設置したコンテナ式の無人店舗(コンテナ)の数を調整して地域需要に対応)には顧客が自由に出入りできます。顧客は個人情報を登録することで事前に商品の売買契約が成立しています。顧客は商品ラックから欲しい商品を自由に選んで持ち帰りますが、誰が、いつ、何を、幾つ買った等の情報がAIを搭載のコンピューターに送られます。もし一定エリアに200個のコンテナ(店舗)があると仮定して、その売上げ情報はそのエリアをカバーする流通センターのコンピューターに集められます。

流通センターに売上情報が集まれば、いつまでに何を幾つ仕入れなければならないか、AIが判断して自動発注が出来ます。納入業者はその発注書に従って商品をコンテナで陳列するパッケージ(包装)で流通センターに納品します。ここで検品を終えた商品は物流機材を兼ねた商品ラック(展示棚)にセットされ、一時自動倉庫に保管されます。

一方、コンテナの販売情報は刻々流通センターのコンピューターで集計されているので、品切れを予測することが出来ます。流通センターには品薄になったコンテナが回収されて、一定数量の商品をセットした商品ラックと品薄になった回収ラックとの差し替えが行われています。こうして商品が満載になったコンテナは、回収コンテナを積んで流通セン

ターに戻ってきた運搬車にセットされ、品薄になったコンテナと差し替えるためにコンピューターの指示に従って目的地に向かいます。

以上のことからお分かりのように流通センターでは仕入れ、検品、品薄になって回収されてきたラックへの陳列、自動倉庫への搬入・搬出、店舗を兼ねたコンテナへの組付けが整然と行われています。

一方、商品を満載したコンテナは運搬車に載せられて、コンテナ置き場(店舗)に向かい、所定の場所に降ろした後、品薄になったコンテナを積載して流通センターに戻ってきます。つまり仕入れに始まる流通センター内のシステムと流通センターとコンテナ店舗の間を往來する運搬車は一連の物流(ロジスティクス)で繋がっているのです。

■コンテナを拡張することで広い売り場を実現

前述した通り、この『モバイルコンビニ』は一昨年オオシマ木工(株)がモバイルモスクとして開発したW拡張車がベースとなっています。

団地の一角などに降ろした店舗コンテナは左右に拡張すると最大約50㎡の売場が出来ます。店舗コンテナは片側だけ拡張するタイプや中型トラックで運搬する物も製作可能です。

とくに、この『モバイルコンビニ』の場合は、固定の店舗(建物)ではないので、場所が確保できれば即座にお店を開くことが出来ます。しかも、コンテナの大きさや数によって自由に規模も調整できます。また、食品や衣料品、日用雑貨など販売する商品によってコンテナを使い分けることも出来ます。さらにイベントで客足が伸びる時や閑散期など、事前に需要が予測出来れば、コンテナの数を調整することで、品切れや売れ残りを最小限に留めることも可能です。

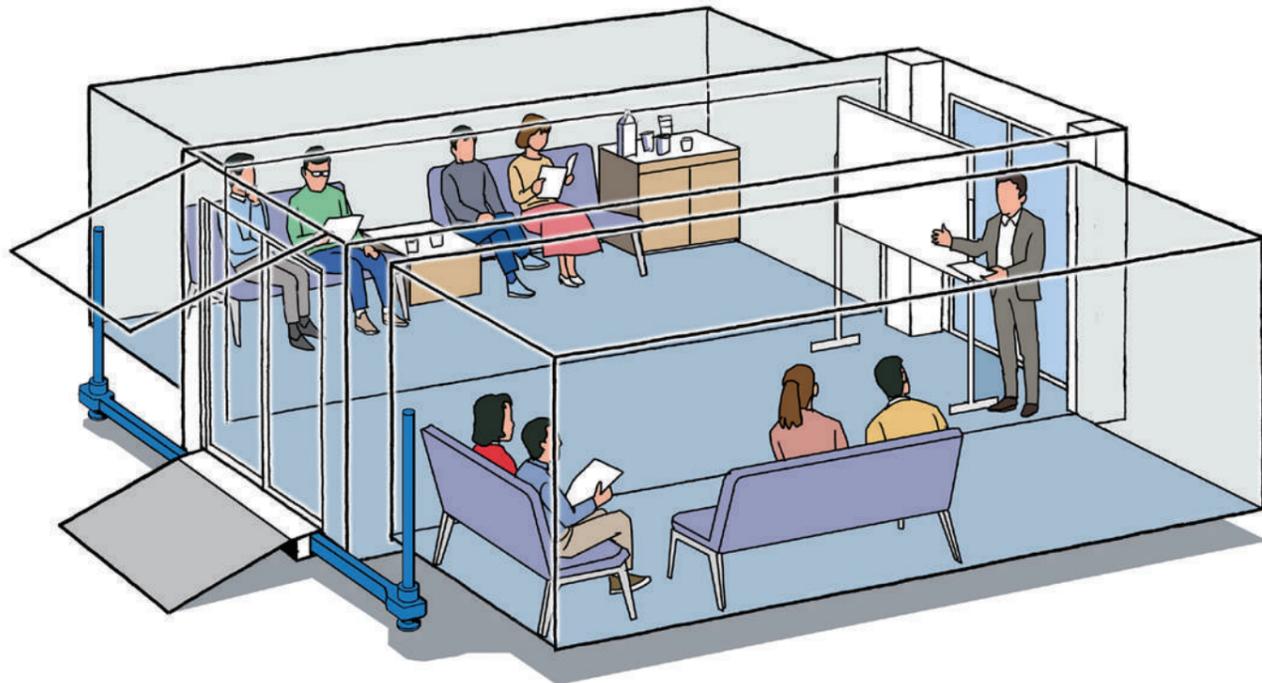
現在、過疎の団地などの“買い物難民”に対しては、小型の移動販売車に対応していますが、『モバイルコンビニ』はお店を開くこととなりますので、移動販売車とは大きく異なります。

また春夏秋冬のお祭りや大きな屋外スポーツ、音楽ライブなどが開催される場合も、期間や時間を限ってにわか仕立てのコンビニを開店することも可能になります。

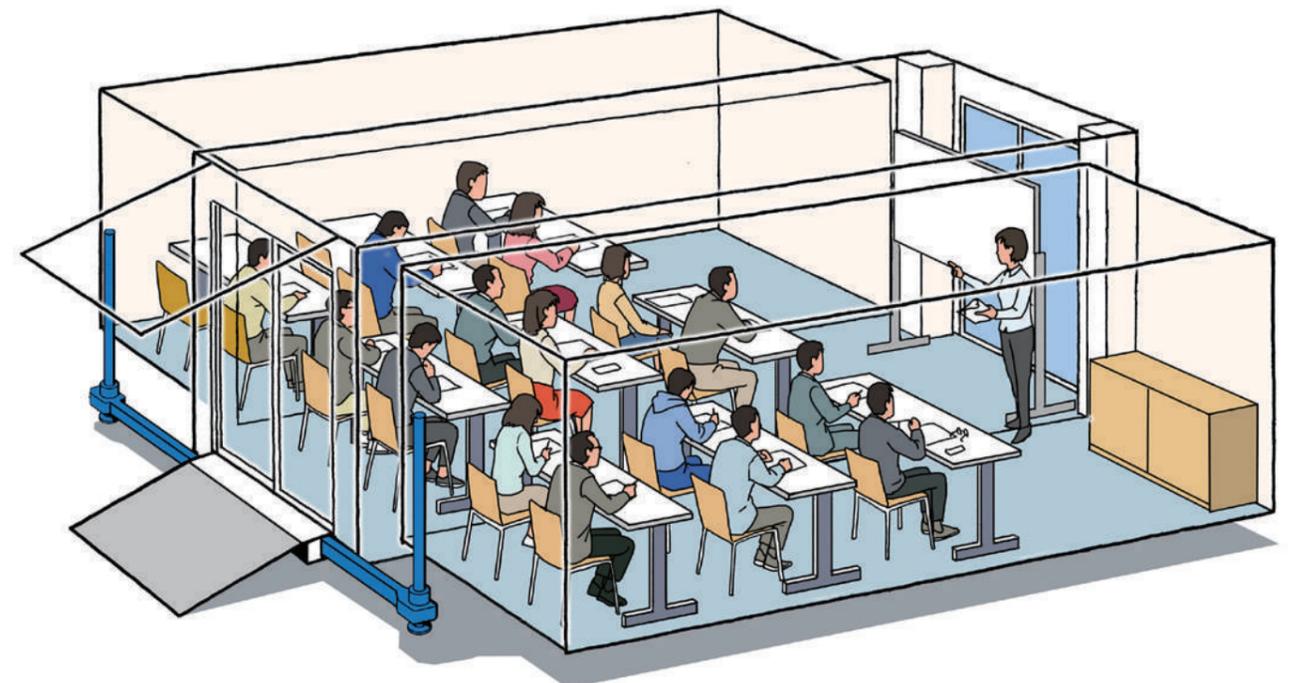
ここまで、『モバイルコンビニ』として、店舗コンテナを紹介して来ましたが、営業形態に近いスーパーマーケットやドラッグストア等にも適応することが出来ます。

最初は店員さんが必要かも知れませんが、顧客が慣れてくれば無人化も可能になりますから“大型の自動販売機”に近いかも知れません。AIやIOTが普及し通信も5G、自動車も自動運転、ロボットも人間以上の作業を熟す世の中は目前です。無人の『モバイルコンビニ』も夢物語ではないように思いますが、いかがでしょうか。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル 集会所』



拡幅コンテナの活用例
『モバイル 教室』



広島の山深い農家に生まれた筆者は、昭和20～30年代、集落の人たちが総出で農作業をするのを見て育ちました。高校を卒業するころにはやっとモノクロテレビがわが家にも入りましたが、娯楽施設は皆無で楽しみは春のお花見、秋のお祭り、運動会といったところ。農作業が終わると、集落の人たちは共同作業の打ち合わせや奉納神楽の練習などで“会館”に集まっていました。

会館はもともと中国が発祥で、商工業者が親睦、協議、互助、祭祀などのために建てた建物ですが、日本では総じて集会場をさすようになっています。集落ができれば皆で話し合いをしたり何かを練習する場所が必要になります。それが集会所です。

“集会所”の名称は、建築基準法では通達の中にしか出てこないですが、用途規制上は公民館と同様の扱いとなるようです。また規模や高さに限定はないようですが、1室の床面積が200㎡を超えるものは建築条例等によって制約を受ける場合があるようです。

大型トラックで運搬する拡幅コンテナは最大で約50㎡の部屋が設置後数分で出現します。空調もついているので春夏秋冬、季節を問いません。

最近は花火大会や音楽ライブ、祭り、屋外スポーツなど大小様々なイベントが全国各地で行われています。小さな集落の“会館”と違って、建物がない広大なスペースで行う大きなイベントでは、打ち合わせをしたり出演者の控え室、機材の置き場なども必要になります。

このような時、拡幅コンテナは建築物ではないので、必要な時に必要なスペースを短時間で出現し、終了後は簡単に撤去することが出来ます。

また限られた期間で行う土木工事や建築の場合は、仮事務所を立てなくてもこの拡幅コンテナで代用することも可能です。リースやレンタルで提供していただければ、利用コストも廉価で済むのではないかと思います。

新型コロナウイルスの関係で、いま多くのイベントが延期や中止になっていますが、日本の文化を支える為にも、この拡幅コンテナを大いに活用頂きたいものです。

今年には新型コロナウイルスの感染を抑制するために、世界中の多くの学校が休校になりました。“学び”は人類の原点であり、活力の源でもあります。コロナが経済に及ぼした負の影響は計り知れないものがありますが、世界中の学校が学びを中断したことによる学習の遅れも図り知れないものがあります。

“教室”といえば反射的に「寺子屋」が脳裏に浮かびます。寺子屋という呼び方は江戸時代の教室の呼び方ですが、当時は上方(京都・大阪方面)の呼び方だったようで、「寺院で手習師匠が町人の子弟に読み書き・計算等を教えた学問施設」とあります。見栄っ張りの江戸(東京)では「筆学所」とか「幼童筆学所」と呼んでいたようです。

戦後間もなくの我々世代は、小学校の教室をシチュエーションにした映画『二十四の瞳』が鮮烈な印象として残っていますが、今日の教室は「理科教室、生活教室、音楽教室、図画工作教室、家庭教室、視聴覚教室、コンピュータ教室、図書室、特別活動室、教育相談室」など

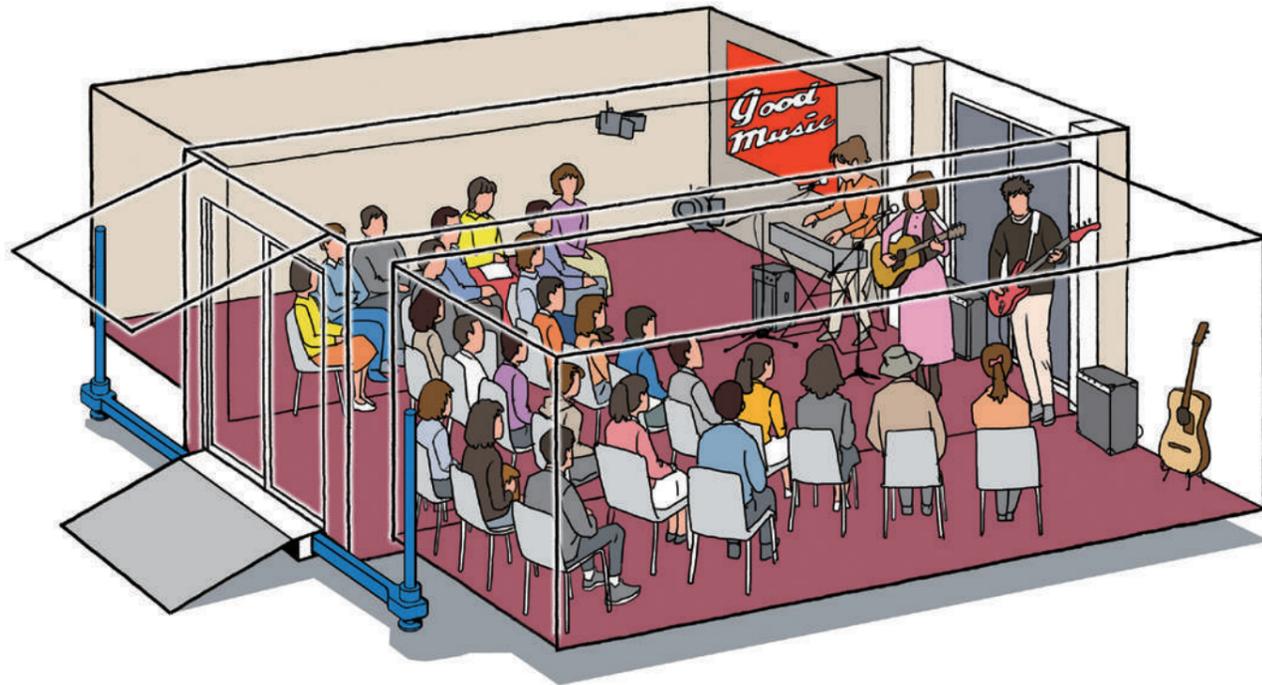
実に多種多様です。

教室に必要なものは、教える内容によって異なりますが、机や椅子、教壇に黒板それに最近ではコンピューターも必需品かも知れませんが、小学校や中学、高校など定期的な学習には校舎が必要ですが、公共の建物もほとんどない場所で一定期間教室を開くためには、何らかの空間が必要になります。

大型の拡幅コンテナは30～40名が同時に学べる約50㎡の空間を短時間で実現することが出来ます。もし100人規模の学生が対象でしたら2～3個の拡幅コンテナをセットするだけで教室が完成します、とくに建築許可も必要ないので、即座に授業や習い事を始めることが出来ます。

大きな災害が発生すると避難場所となった学校は暫く被災者でいっぱいになってしまいます。この拡幅コンテナは、普通のトラックで簡単に運べるので一時的な避難所としても活用できます。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル ライブハウス』



筆者はふたりのアーティストと親しく交流しています。一人は本誌の映画解説(Movie A Go Go)を担当しているUkoSaxy(ユーコサクシー)さんともう一人は舞台女優の君島久子さん。Ukoさんは毎月自己紹介を掲載しているので紹介の必要はないと思いますが、既に10年を超える親交になります。君島久さんは本誌が主催するITVショーでオープニングの司会を担当して頂いたので覚えておられる読者もあるかも知れません。昨年は7~8回の舞台を熟しておられます。

今回の新型コロナウイルスで最も大きな影響を受けたのは三密(密閉、密集、密接)になりやすいライブハウス。感染が広がり易いので緊急事態宣言の発令で最も目をつけられた業種で、一斉に営業を休止しました。困ったのは殆どが個人の資格で出演しているアーティスト達。ライブハウスが休止したのでは公演できないので収入の道が断たれる訳です。

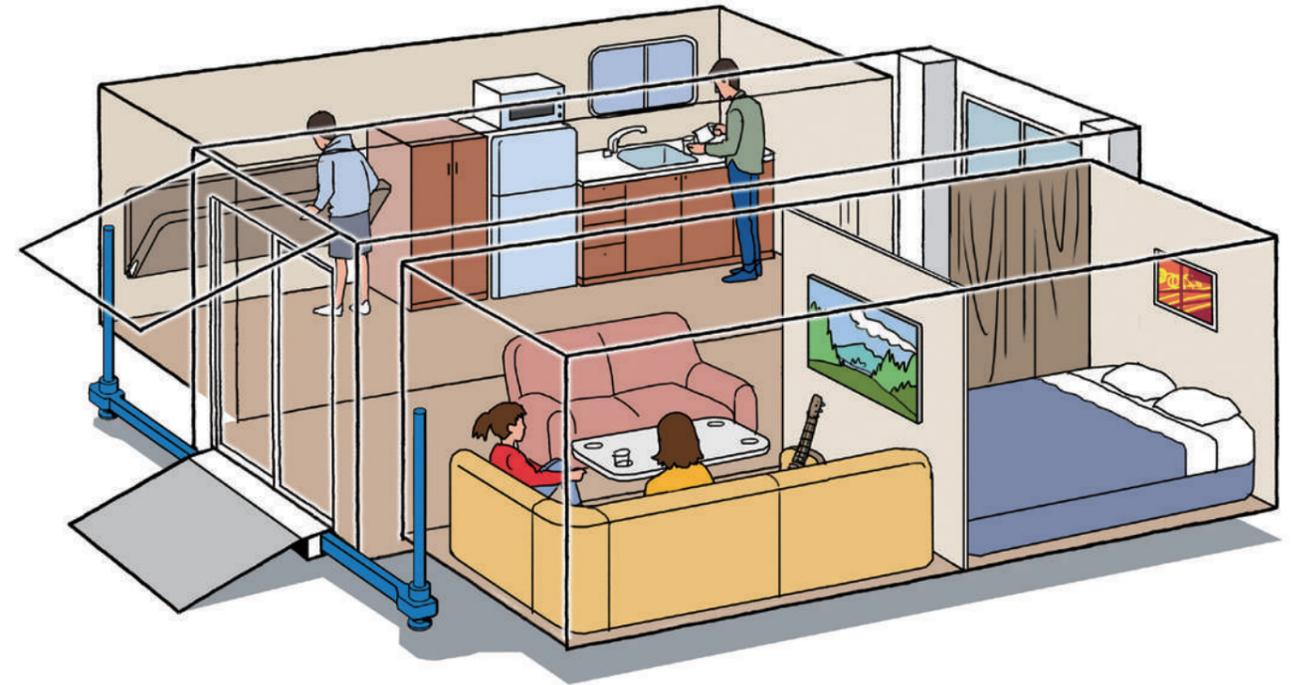
筆者は武道館や東京ドームなどで開催する大規模なライブには殆ど行きませんが、マニアックな演劇には時々出掛

けます。時には満席になっても観客より出演者の人数が多いのではと思われるほど小規模なライブもあります。1~2時間のライブでも一所懸命に稽古したアーティストの息遣いが伝わり、小規模なライブハウスも魅力があります。

今日でもまだ残っているようですが、昔は「旅役者」と呼ばれる劇団が沢山ありました。娯楽の少なかった当時は自分たちで「芝居小屋」を建てて演劇を披露していました。

今日のライブハウスは集客の関係で都会に集中しているようですが、過疎の人たちも演劇や演奏会、歌謡ショーなど楽しみたい気持ちは同じ筈。ミュージシャンの中には独自でステージカーを造って地方公演に出掛ける人も居ますが、この拡幅コンテナは短時間で「ライブハウス」を出現できるので、ローカルのお祭り等とジョイントすれば喜ばれる筈。脱着できるので祭りが終われば撤去も簡単。用途が限定されれば照明や音響も自由にアレンジできるので、新しいショービジネスが実現するかも知れません。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル キャンプ』



日本は施設や休暇の関係でオートキャンプが意外に発展していません。欧米では定年してお金や時間もある人が、大きなキャンピングカーで1か月以上も家族旅行する人たちが珍しくないそうです。既にトレーラーハウスは日本にも輸入されていますが、箱型のトレーラーを一定期間「住居」として活用する方法は、建築許可が必要ないので、先進国ではかなり普及しているようです。日本では東日本大震災が発生した時に、商店街の代わりに飲食の提供や生活必需品の販売に活用されたようです。

この拡幅コンテナは大きな空間を提供できる点ではトレーラーハウスと似ているかも知れませんが、積載車がなければ移動させる事は出来ません。トレーラーハウスはタイヤがありますがトラクタで牽引しなければ移動できないので、その点は共通しているかも知れません。

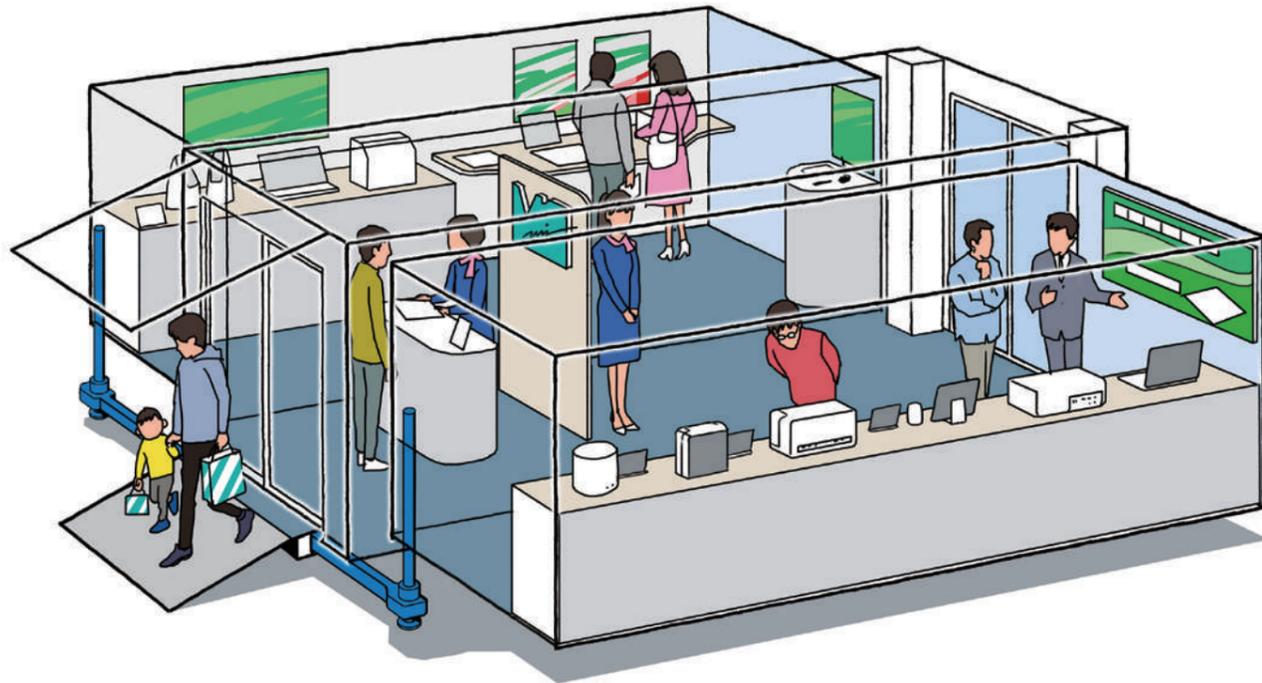
オートキャンプ白書によりますと、日本のオートキャンプ人口は1996年が約1580万人で最高でしたが、その後減少傾向に転じ2008年には半数以下の約705

万人になりました。また施設の数も統計を取り始めた2000年以降に開設されたオートキャンプ場が20%に満たなくて、施設の老朽化や参加人口の減少等によって数も減少していると見られています。しかし、オートキャンプの参加人口は2013年から増加に転じて、その後5年連続で増え続けています。サウナのあるキャンプ場など施設も良くなったことや車社会で生きてきた団塊世代が定年を迎え、余暇を楽しむ高齢者が多くなったのではないかと考えられます。

また、キャンプ場の稼働率も2017年は2003年以降では最高の平均15%を記録しています。

オートキャンプは文字通り自動車を対象にしたキャンプ場で、有料で電気や水道、テントなども用意されています。でも、この拡幅コンテナは最大で約50㎡のスペースを短時間で創出しますので、設置できるスペースさえあれば、グループでオート(コンテナ)キャンプを楽しむことができます。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル 展示場』



上野などの大きな美術館や博物館では世界的に有名な絵画や彫刻などの展示会が大規模に開催されますが、本誌事務所のある銀座から京橋にかけては小さな画廊が沢山あります。絵画だけでなく写真や手芸、活け花が展示される事もあります。

最近ではカメラの性能が良くなり素人でも写真を趣味にしている人が多くなっています。いつか写真展を開くのですか？と尋ねると殆どの方が「いえ、単なる趣味ですからそんな事考えていません。」と応えます。

でも内心は出来栄の良い作品は誰かに見て欲しいと考えているものです。ただ、そのチャンスがないので諦めているだけです。

この拡幅コンテナの内部を幾つかのパーテーションで区切ると相当数の絵画や写真を展示することが出来ます。文化的色彩の濃い内容でしたら地域の学校の協力も得てグラウンドの一角に設置しても喜ばれると思います。

ファッション性の高い衣料や化粧品、健康の為に機材や補助食品など次々と新商品を開発する企業は販売促進

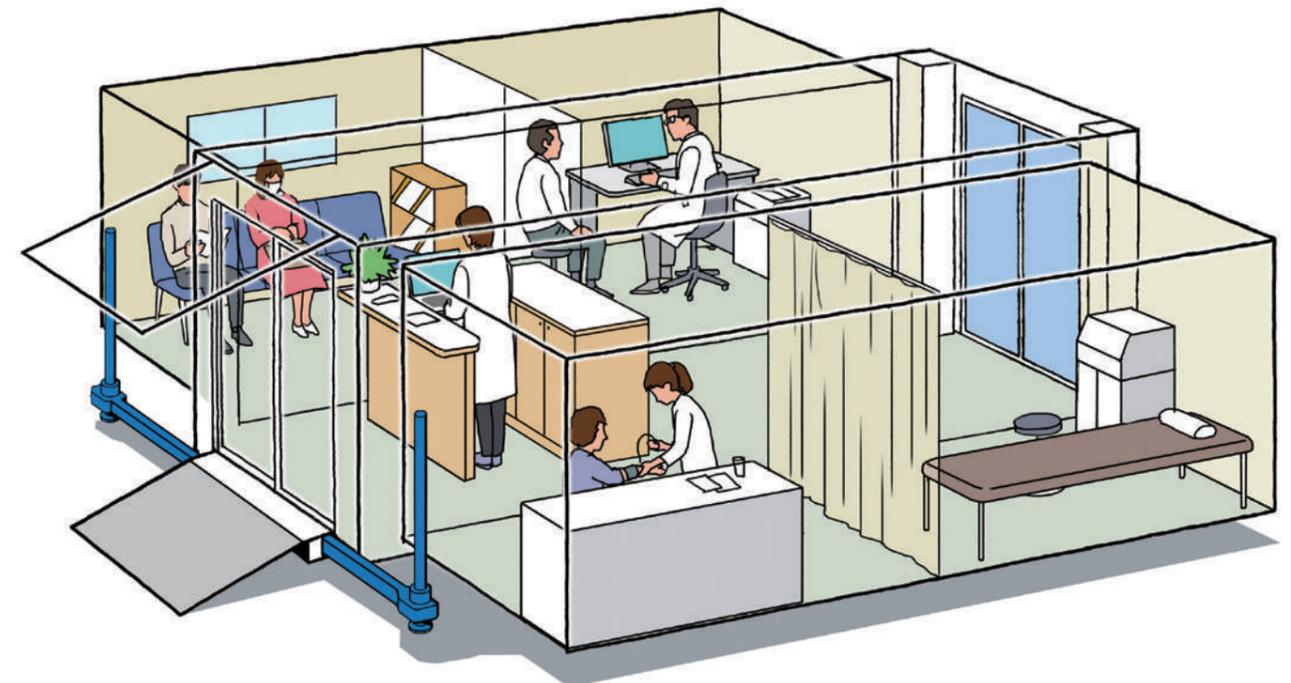
のためのデモンストレーションとして活用しても大きな効果があるかも知れません。

筆者は東京トラックショーの主催・運営など過去30余年にわたって展示会の開催に係ってきました。東京ビッグサイトや幕張メッセなど広大な会場を借り受けて、出展企業の展示場所をレイアウト(小間割り)するのですが、煌びやかな装飾を施した展示場も数日で撤去されてしまいます。

また、展示施設を使わない屋外の展示も行われます。当然のことですが、屋内よりも出展料金は大幅に割安になります。屋外で展示する場合は来場するお客様を接客する為のテントは用意するのですが、展示品は野ざらしになっています。その意味で屋外展示はお天気が良ければラッキーなのですが、雨天になるとお手上げです。

この拡幅コンテナは台風並みの強風にも耐えることができます。大きな展示会の屋外に幾つかの拡幅コンテナを置いても、屋内展示と同様の効果が得られるのではないかと思います。その他、この拡幅コンテナを活用すれば独自の展示が実現します。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル 診療所』



今、新型コロナウイルスによって世界中の診療体制が大ピンチに陥っています。人は母親の胎内に居る時から病気と背中合わせの関係にあります。しかも、独自の文明・文化を構築したことによって自然の摂理を超えた病も数多く発症しています。これらの病気と闘うために様々な医療制度も構築してきましたが、今回の新型コロナウイルスはこうした人類の行いをあざ笑うかのように分け隔てなく襲いかかってきます。新型コロナの猛威に手をこまねいていると、短期間のうちに万の単位で感染者が増加し命が危険に晒されます。また、新型コロナに目を奪われていると、従来の病気に対応できなくて、助かる命も助けられない事態に陥ってしまいます。これが医療体制の崩壊です。

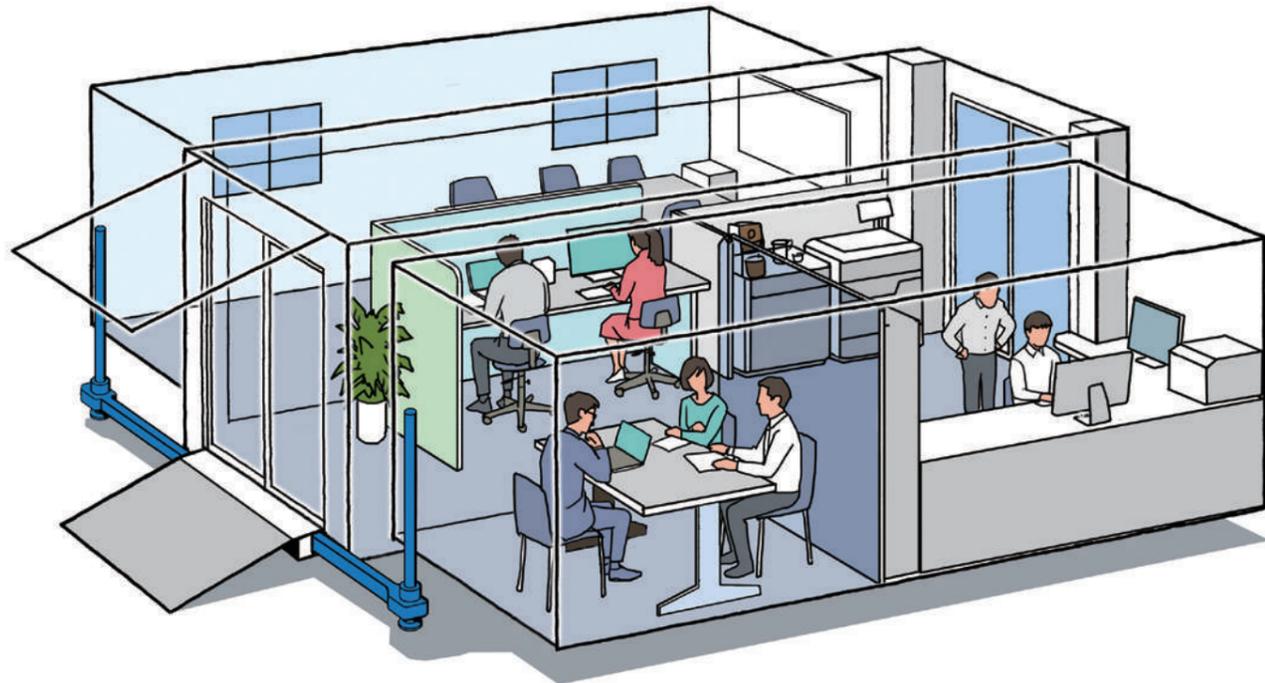
今回、日本は新型コロナの感染が一気に拡大の様相を見せ始めたところで、政府が緊急事態宣言を発出、学校を休校にする一方で国民にも外出の自粛を強く呼びかけました。そして一ヶ月後、その成果が見えて来ましたが、更に念を押す形で緊急事態宣言を延長、感染者の数が一部地

域を除いて限りなくゼロに近づいたところで、解除に踏み切りました。

日本の緊急事態宣言は罰則のない法令ですから、政府および自治体はひたすらお願い(要請)に徹しましたが、再三の大規模災害を経験して復興への思い遣り、相互扶助の精神が根付いていたことが、新型ウイルスの封じ込めに成功した要因ではないかと思われます。海外でも同じような都市封鎖、ロックダウンが行われましたが、生活苦に耐えられない市民が休業中のお店を襲撃して商品を略奪する様子も報道されましたが、感染拡大を食い止める事は出来ませんでした。その意味では今回の結果は「日本の奇跡」として注目を集めています。

災害が発生すれば忽ち必要となるのが避難所と緊急物資ですが、怪我人や病人を手当てする「診療所」も不可欠です。災害現場の近くにテントを張った俄仕立ての診療所はよく見かける光景ですが、もしこの拡幅コンテナを常に全国の自治体が保有し、いざという時には一斉に集結する。こういう体制は平時の時に構築しておく必要があると思います。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル 事務所』



今回の緊急事態宣言では企業や団体などに対して人と人の交流を前日比70～80%まで減少してほしい、という政府の要請がありました。日本がビジネスの大きな力と信じて来たのは人と人のネットワークでした。とくに寝る時間も惜しんで働いた団塊世代の人たちは、“信”を基本にした人間関係が大切に、困った時に助けてくれるのは“人”なので、日頃のお付き合いを大切にきて来ました。事実、そういう考え方が実績として残って来たのですが、一方でIT時代に乗り遅れる結果も招いてしまいました。

人と人の交流を70～80%減らすことで困惑したのは、やる気旺盛な営業マン達でした。人に会えないなら電話でアタックとなりますが、日頃から慣れていないので電話の対応も要領を得ません。会社も「人と会う必要がないなら出勤しなくていいから、自宅で仕事をしなさい。」とステイホームの指示が下る。

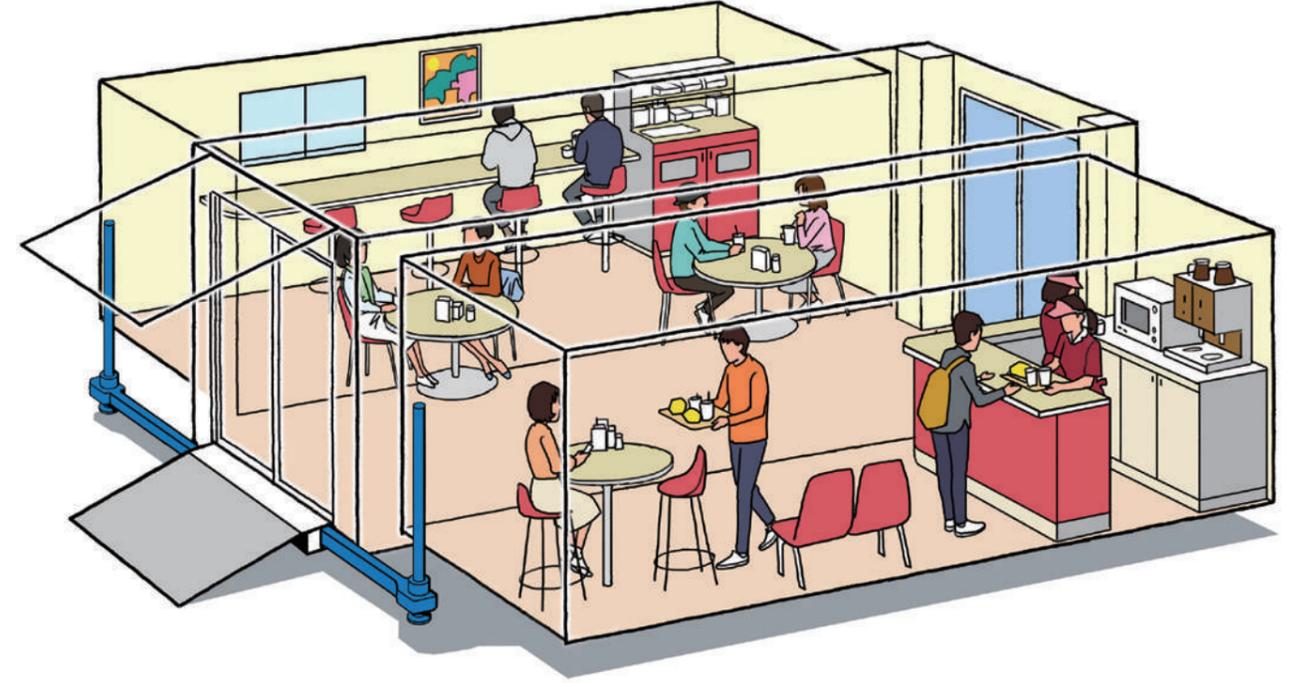
そこで本気で取り組み始めたのがインターネットを活用するテレワークです。勤務する場所は会社の事務所で

なくてもいい。場合によっては海外でもいい。出勤しなくてもインターネットなどを活用して企業に貢献する働きをすればいいという働き方です。

人は意外に「自分に甘くて他人に厳しい。」ものです。今回のステイホームで、時間の使い方から顧客との折衝まで自分でプログラミングしたサラリーマンがどれ程居たでしょうか。サラリーマン生活が長い人ほど自己管理は意外に難しいものなのです。

しかし、世界の常識がテレワークになっている今日、その体制に順応することに慣れているのも日本人の特性です。新型コロナが終息しても広いオフィスに大勢の社員が出勤するスタイルは減少し、自然に恵まれたローカルに居を構える“自宅出勤”が多くなるに違いありません。しかし、企業の事務所はホントになくていいのでしょうか。私は日本人の気質として、必要な時に必要な期間だけ使える拡幅コンテナの事務所は大きな役割を果たすのではないかと考えています。

拡幅コンテナの活用例
『モバイル 食堂』



今回の新型コロナウイルスの緊急事態宣言で最も大きな影響を受けたひとつが飲食業界でした。とくに下町で美味しいものを安く、より多くの人に食べてもらうことをコンセプトに、顧客をグューグュー詰めしていた居酒屋さんは悲劇でした。もともとムードとして「3密」がお店の特長になっている飲食店は多いのです。

最近ではめっきり少なくなりましたが、お花見シーズンや秋祭りには近くに露天商が連なって屋台を出してました。いま振り返ると衛生環境は最悪だったのではないかと思います。

大型トラックで運搬するW拡幅コンテナは最大約50㎡の密閉空間が短時間で出現します。50㎡は4.5畳の部屋が約3～4室の広さですので、飲食店としては結構な規模です。勿論、片側拡幅、中型用など、もう少しスモールサイズも製作可能です。

拡幅コンテナと固定店舗の違いは、コンテナは建築物ではないので検査が厳しい建築基準法に抵触しないという点です(飲食店を営むためには保健所の許可が必要)。また、

目的が終わればフォークリフトやクレーンなど荷役機械がなくても短時間で移動できることも特徴のひとつです。

日本は観光立国を目指していますので、最近では多くの観光客が内外から観光地を訪ねます。桜や紅葉、薔薇やツツジなど、シーズンに合わせた観光が賑わうのは期間が限定されます。昔の芝居小屋のようにタイムリーな時期だけ選んで開くことが出来るモバイル食堂は繁盛間違いなしです。

☆☆☆☆☆

以上、拡幅コンテナの活用例を思いつくまま紹介しましたが、いつでも、どこでも、必要な空間を提供できるのが拡幅コンテナの特徴です。用途開発は読者ご自身です。この拡幅コンテナはオオシマ木工(株)と(株)メイダイが製作しますが、本誌が窓口になりますので、ぜひご一報下さい。

株式会社日新・ITV 販売事業部

〒104-0061 東京都中央区銀座2-11-9 三和産エビル7階
電話 03-6278-8905

Eメール: yokoro@nissin-news.co.jp